

## 10-8 超軟弱地盤での盛土施工、他工区との調整を任される

### 1. 立場と仕事

建設会社に入社13年目のこと、高速道路建設工事における工事主任として配属され、後に工事課長となる。低入札の事案であり、事務所の職員10名での体制であった。担当する業務は、他工事との工程調整である。過去に同種の工事の経験はあったものの、協議・交渉業務を行うのは初めてであった。

### 2. 遭遇した事態

本工事は、厚さ40mもある超軟弱地盤において、動態観測を行いながらプレロードを行うものである。工事前に実施した試験盛土が、日に日に沈下していくのが分かるような難しい地盤であった。そのような地盤に対して、10kmの範囲（大きくは4地区で分かれる）に飛び飛びに位置する重要構造物の箇所において、速度を調整しながら盛土を行わなくてはならない。6~7社程度ある他工区においても同様に盛土材を利用していたが、プレロード単独なのは当工区だけであった。工区内に切土施工が少なく、ヤードも限られているため、盛土材の手配は円滑に工事を進める上で非常に重要であった。また、発注者と地元との調整で、盛土に使う土は外部からの受け入れ土も多かったが、発注者としては工事用の共有の土取り場を極力温存したいという意向もあった。

工程調整会議には、多数の工事業者が出席しており、社の状況によって優先順位が異なることもあり、交渉が難しかった。そのため、施工の順番を組み直さなければならないこともあった。プレロード盛土による沈下予想は難しく、箇所毎に施工条件も異なる。当初は、調整不足で盛土材の調達が出来なかったり、逆に受け入れ準備が整っていない時に受け入れを迫られたりと、対応が後手後手に回った。軟弱地盤ゆえ一度に盛土を大量に受け入れてしまうと地盤が沈下するトラブルに繋がる。また、外部からの受け入れ土に品質が悪いものもあったりという苦労があった。

低入札ということもあり、発注者のチェックも厳しい状況で調整業務に追われる毎日であった。

### 3. 対応内容とその結果

そのような中、所長の「信頼される仕事をしないと駄目だ、しっかりやろう！」という言葉で皆が一丸となった。

最初は職員が現地でその都度計測していたが、途中から自動計測にして動態観測専属の職員を技術研究所から配置してもらい、沈下量の予測精度を上げることで、各プレロード箇所の必要土量予測や詳細盛土工程を作成した。そして、外部からの盛土材の情報を早期に把握し、他工区の状況も把握しながら、工程会議での交渉を優位に進めることができた。

日々パズルを組み合わせていくような作業だったが、自工区の切土と他工区からの盛土材の受け入れをバランスよく配分し、工期内に盛土を完成することができた。大変な苦労であったが、最終的には発注者から大いに評価され、無事に工事を完成させることができた。